
輪廻と僕

雲天道風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻と僕

【Nコード】

N6344G

【作者名】

雲天道風

【あらすじ】

生まれ変わっても記憶は残る。14歳の春が人生のスタート。はたして少女の正体は？

第1話 新たな人生

またか・・・そうだあの日トラックで・・・
なら今は14歳の春だな

今日は4月8日

中学2年生の始業式

クラス替えが待ち遠しいとばかりに、廊下の前には
すでに人が集まっていた。

『もー風おっそーい。普通こついう日は早く来るでしょ』

「うん。ごめんね」

『まあいいけど、それじゃあ』沙希「こっちこっち！」

『ごめん風、いくね』

「うん」

そうして沙希という少女は走っていった。はたから見ても
沙希から見ても、僕達は前からの友達に思える。
でも僕は、今産まれたも同然だ。

『風、何ボツーとしてんのよ。クラス張り出されたわよ』

「本当だ」

『凧、あたし達今年も一緒にクラスだよ、やったね』

「うん。僕も嬉しい」

ニコツつと微笑むと、後ろから声がした。

『淡井、今年も一緒にクラスだな。俺達何年一緒なんだろうなあ』
ハハハつ、と背の高い男は笑いながら話してくる。

その男に沙希は

『はいはい、腐れ縁って感じの奴でしょ？』

亮戸は今後凧には触れないでね』

と、亮戸という男を払うように追い返した。

『その3人組、さつさと教室に入れ』

先生の合図で僕達3人は教室に入った。

教室に入りながら考えていた。

今度の名前は淡井凧っていうのか、それで友達に沙希
腐れ縁は亮戸と……

それから……『淡井！さつきから呼んでるだろ』

「すみません先生……」

『ボツ！つとして、淡井まで気を抜いてるのか？』

「いえ、すみません……それでなんです？」

『ああ、旧委員長のお前に入学式の言葉をお願いしようと思ってな。』

」

「はい。わかりました」

それから、僕は旧学級委員長か・・・

それにさっきの先生の言葉からして、今度の僕はそうとう真面目な子だな。

この前があれだったから変な感じだな・・・

第2話 わからない

それから僕達クラスは体育館へと向かった。

そこから入学式、始業式が始まった。

先生の話などが終わり……

そしてとうとう僕が言葉を言う番まで回ってきた。

【1年生になってマダ不安な気持ちや、わくわくした気持ちなどがたくさんあると思いますが、私達先輩のように学校にはすぐになれると思います】……（省略）

出番がなくなつては、後はまた話を聞くだけになった僕、僕は自分のことを考えた。

最初に僕が生まれたのは、もういつか覚えてない。

これで何回目の人生かも覚えていない。

普通の人間もなることに、僕は少しだけ違う部分がある。

人間は死ねば、輪廻転生をして、また別の人生を送る。

だが、普通の人間は前世ともいえる記憶がない。

それが普通だ。

だが、僕は違う……僕は死ねば

必ず14歳の春に目を覚まし、新しい体に、新しい性格になる。

つまり輪廻を転生して来世に行くと、14歳の春からの人生になるのだ。

そして前世の記憶が残っている。

転生すれば転生するたびに、記憶が増える。

そして名前も変わる。確かに人生のスタートは14歳のはずなのに、

皆の記憶には僕が昔からいる。

僕の体はすごく不思議だ。どういう仕組みでこうなってるのかはわからない・・・遺産なのだろうか？僕には親や、親族がいらないから、そんなことはわからない。

もしかしたら遥か昔の一番初めの人生にはいたのかもしれないが、そんなことは忘れた。だから自分のことが・・・この能力とでも言える体質がわからない。

考えれば考えるほどに、謎は深まるばかり

こんなことを考えたのは、今回が初めてだった。いつもは何かとエンジョイして

それでもって、必ず僕は14歳の間に死ぬ。

この呪いとも言える人生を考え、なぜ対処しようとしなかったのだろうか？

もう全てがわからない・・・わからないことだらけだ・・・

第2話 わからない（後書き）

解説ばかりでしたね。

説明が上手にいけないかわからないのでその変はごめんなさい^^;

第3話 知ってる人が一人！？

入学式も終わり

みんなが下校する時刻になった時

『凧ー一緒に帰ろー』

沙希がやってきた。

「うん。いこつか」

そして歩き出した僕達・・・下校中に僕はいつも聞くことを沙希に聞いた。

「沙希とはいつから友達だっけ？」

『何？いきなり』

「いや、なんとなく」

『そっか。凧には記憶ないもんね』

「えっ！？」

今彼女は、僕が記憶がない。と言ったよね？確かに僕は今日生まれ
たから記憶はない。でもそのことを誰にも話していない。のに、彼
女はそのことを知っていた。

『何で僕的能力しってるの？って顔してるね』

「僕のことを知ってるの？僕の輪廻のことを知ってるの？」

『まあね。知ってるよ、今回が初めて？知ってる人と会ったのは』

「初めてって・・・知ってる人はそんなにいるの？」

『風が生まれ変わると同時に、その人は一人生まれる。風が生きるところに、その人はいる。必ず一人、どこかにいる』

「どういう意味？」

『風が死ねばその人も死ぬ。風のように特別な能力を持っている人が』

「じゃあその人も、来世にいつても記憶はあるの？」

『それはない。ただ役目を与えられるだけ。来世になるのは人間どおり』

「役目って何？」

『風に関係あること』

「僕に？」

そこまで言つと沙希は黙って歩きだした。

沙希は今回の役目を与えられた人。って考えていいのかな？僕に関係ある役目・・・沙希ならどうして僕がこうなるか、知ってるのかな？

でも沙希のような人は一人って・・・じゃあ役目って誰に与えられ

たの？

沙希は全てを知ってるのかな？

僕の全てを

第3話 知ってる人が一人！？（後書き）

短かったね・・・一気に書く方向せい間違えるので^^；
これからもこんな感じです

第4話 僕の原因

君はそこにいる。

なぜそこにいる？

それには理由があるからだ。

君は覚えていない。

でも理由はある。

君の初人生に理由がある。

ほら、思い出してごらんよ。

あの出来事を。

『夢・・・だよね・・・』

なんだったの？今の夢

僕がここにいる理由？

僕の初めての人生？

【あの出来事】

あの出来事ってなんなの？

思い出せなんていわれても、そんないつかわからない昔、わかるはずないよ。

沙希、僕はなんなの？

教えてなんてくれないよね・・・

考えているうちに、また眠気に襲われた。

「風、そんなに知りたい？どうしてそうなったのか。何があったのか。

本当に知りたいの？」

『沙希？うん・・・僕は知りたい。僕の全てを、お願い
教えて、僕の全てを・・・』

「知ったときに、風はどうするんだろうね。風にはしなくてはならないことがあるの。

それを知ったら必ずやってほしい」

『しなくてはならないこと？』

「風が望んだことなんだよ。初人生の風がね。私の初人生が望んだことでもあるんだけどね」

『僕達は昔から知り合いだったの？』

「そう、私達は知り合いだった。私達の初めてって、そんなに昔じゃないんだよ。

そう、あれは今から約5年前だね」

また夢・・・だったのかな？

でも沙希が夢の中で教えてくれた。僕の質問に答えてくれた。5年前？そんなに最近の話だったの？

僕は転生しても記憶があるはずなのに・・・

そういえば僕が覚えてるので、これ5回目だ・・・

初めての人生だけ、思い出せないってことか・・・

第5話 前世の自分達

「ねえ風、あたし達はここから逃れられるのかな？」

『大丈夫。きつと大丈夫だよ。あたし達は逃げれる。ここから逃げるの』

明かり一つ窓一つない部屋に二人の少女はいた。

少女達の話す会話は、穏やかなものではなかった。

それ以前に、この部屋が穏やかではないだろう。

少女たちの周りには、数十人も人がいた。

もうすでに人としての活動はしていない。

いわゆる死体という奴だ。

二人の少女は数十人の死体の中での唯一の生き残り者だった。

どうしてこんな自体になっているのか、それは少女の体の傷が物語っていた。

「あたし達は逃れられるの？」

少女はまた風という少女に尋ねた。

『逃げられるよ。大丈夫。だからあたし達は生きてるのよ。そうでしょ？沙希』

風という少女は沙希という少女に答え返した。

真っ暗でお互いには顔が見えない。見えないけど確実に二人は向き合っている。

まるで相手の顔が見えているかのように、相手の顔を見ている。

二人の少女はずっと話していた。

話していた。というよりかは、沙希という少女の一方的な質問に凧という少女が慰めるかのように答え返していただけた。どこから見ても少女が話す会話ではない。

二人は向き合っていた。

お互いに顔をしっかりと見つめ。

だが、二人とも、どんな会話をしても無表情だった。

暗いくらい部屋の中、少女たちには感情というものはないのだろうか。

沙希という少女の質問は、悲しいものばかりだった。

だが沙希は、悲しむも、涙を流すもなかった。

凧も、ただひたすらに慰めるかのように答えていただけだった。慰められているのに、沙希は口元を緩めることをしなかった。

暗いくらい部屋の中、光が指した。

光が指したかと思うと、数人の男性が入ってきた。

男達は白衣をきている。実験をする人のようだった。

少女たちは暗いくらい部屋から解放された。

男たちに誘導され、ある部屋へと別々に入れられた。

その部屋はさつきとは違い、光にあふれていた。

少女たちは暗闇から光があふれる部屋にきたにも関わらず、目を細

めることもなく仰向けに寝かされるのを、されるがままにしていた。まるで、もう慣れているかのように・・・

「風、これを他人のこと。なんて思わないでね。これは確実に貴女のこと。いえ、あたしたちのことなんだから」

『僕たちのこと?』

「・・・僕って一人称やめない?」

沙希は僕の一人称を否定した。

たぶんそれはさっきの風という少女と関係がある。他人のこと。と思わないでね。

これはもしかしたら・・・僕達の前世。

初人生の僕たちのことなのかもしれない。

恨みをはらすために僕達はここにいるの?

恨みをはらすために僕はこの人生を繰り返してるの?

「風聞いてるの?あたしにもそんなに時間ないんだからね。前世を見せただけでも結構大変だったんだから・・・」

『僕は僕。例えばあれが前世でも、僕は生まれ変わるたびに変わる』

僕は認めたくなかった。

この能力を・・・

もう5回も味わっているこの能力。

性格が変わる。名前も変わる。

それが僕に冷静さを与える。

「風貴方が今みたのは、あたしたちの前世。今の貴女の名前と、さっきの名前を比べてみて」

『僕の名前は今回は風。さっきの前世・・・風。後、沙希も沙希だった・・・わかってたけどこれはどういうこと？あたしは名前が変わるはず、なのにどうして？』

そう、あたしは生まれ変わって、記憶があっても。

名前は絶対に変わってた。

「風、今の風は初人生の風と全く同じなの。性格も名前も、何もかも全てが一緒なの。だから、あたしって呼んでほしい・・・」

『僕が僕って言うてるのは、ある人生のときからの。僕は今まであたしって言うてた。言うてたの。でもね、ある子に・・・』

話すの？話すべきなの？僕がどうして僕って言ったのかを。

あれは思い出したくもない。

強制的だなんて・・・

「風、言わなくてもいいよ。あたしには貴女のことなんでもわかるから。知ってる。あたしは貴女がどうして僕っていうか知ってる。でも、だからこそあたしって言うてほしい」

僕が僕って言うようになったのは、ある人生のときに、僕はすごく男っぽかった。

それで、すごくいじめられっこで、一人だった。

そんな僕をいじめてた奴に「男のくせにあたしなんて気持ち悪い」そういわれた。

今あいつらがいるわけではないけど、僕はあいつらのことが忘れられなくて・・・

『僕はもうあたしなんて言えないよ。だって・・・知ってるんだっ
たらわかるでしょ？あたしが何で嫌なのかを』

「初人生の凧はこんな小さなことは気にしなかった。最後まで前向
きで、あたしを励ましてくれた。どうして凧が覚えていないのかは
わかるよ。覚えていないんじゃないやなくて、消されたから」

『消された？』

僕の記憶は消された。

誰に？

さっきの凧に何かをしようとした男たちに？

でも、どうして記憶を消す必要があったの？

もしかして凧に能力を持たせたのはあいつらなの？

「続きみていく？」

『凧と、貴女の・・・』

「凧と貴女じゃなくて、あたしと貴女でしょ？」

やっぱり凧はあの男たちによってこうなったのか？

でもあれは僕でも、今の僕じゃない。

いつも性格も名前も何もかもが変わるはず、それなのに何もかもが
一緒なんてありえない。

『凧のころの人生を見せて』

「素直じゃないね・・・でもごめんね。今はこれでおしまいみたい。
また来るよ」

沙希は僕の目の前から姿を消すと、目覚ましの音が頭に響いた。

目を開くと、あたしは目覚めたらしく、自分の部屋が視界に入った。

第6話 始まりは・・・

熱い・・・あれ？クラクラするな
体を起こすとフラつく、頭が痛い、視界がかすむ・・・

ダメだ・・・今日は学校に行けそうにないな・・・

あれ？意識が遠のいて・・・

ドサッ

「君達どうしたの？親は？」

二人の少女は同時に首を横に振った。

二人はしっかりと手をつないでおり、姉妹のように仲が良い。

「おじさん達と一緒に来るかい？」

二人の少女は顔を見合わせた後、同時にコクリと頷いた。
それを確認した男の人は、少女達に手を差し伸べる。

優しい顔のおじさんに、二人は信じて疑わなかった。きっと良い居場所が出来る・・・

片方の少女が躊躇することなくその手をとった。

小さな手は、大きな手に包まれて、尚も幸せそうに歩いて行った。

その先に待ち受けているものも知らずに・・・

「ここが今日から君達のお家だよ」

綺麗で大きなビルのような建物。

男は少女の手を取ったままその中に入っていく。

入った先には受付のようなところがあり、普通の会社のような感じだった。

が、エレベーターで上がったところの廊下は、さっきとは別の建物ではないのか？

と、思うぐらいに薄暗かった。

廊下はほぼ廃墟のような感じになっていた、その先を男は黙って歩きたず。

少女達は廊下を見渡しながら歩いていた。

が、特に怖がるもおびえるもなく、黙って男に手をひかれながら歩いていた。

やがて一つの部屋の前で男は足を止めた。

扉を開くと、そこには少女達とたいして年の変わらない子たちが数十人もいた。

皆白いワンピースを着ていて、それぞれが何か玩具のようなもので遊んでいた、寝ている者もいた。

が、少女達が入ってきたことに気づくと、全員が少女達の方へ体を向けた。

寝ている者も、そそくさと起きて、少女達の方を向く。

それを確認してか、しないでか、男は口を開いた。

「今日からこの子達も、君たちの仲間だよ。仲良くしてあげようね」

男の言葉に、全員は一斉に首を縦に振っただけだった。

一言も喋らずに、皆は男の言葉を待った。

「これを言いに来ただけだよ。じゃあね、二人共」

男は少女達を部屋に残して、去ってしまった。

皆はまた元のようにそれぞれのことをしていた。

だが、何故か皆無言。

さすがにこれには少女達も首をかしげた。

お互い顔を見合わせる。でもこの空気の中、口を開けなかった。

最初はあたし達のように、心を閉ざした少女達が集まる施設だと思っただ。

ここの本当の目的を知るのは、かなりの先の話だった。

「今のはなんだろう？もしかして僕の初人生の夢・・・なのかな？でもあれは沙希に見せてもらってたから・・・違うはず・・・」

意識が戻った頭で、必死に今の夢を思い返そうとしていた。でも頭の中の何かがそれを拒んで、ちゃんと思い出せない。やっぱり今のは初人生の自分なの？

第7話 過酷な前世

『うつ・・・ぐっ・・・』

頭痛が・・・とてつもなく痛い。

頭が割れそう・・・

何・・・この感覚・・・

頭の中から何かが呼び覚まされるような・・・

『いや・・・だ』

どうして、僕はどうして拒んでいるの？

こんな感覚初めてなのに、僕はこれからあることを知っているんだ・

体が、勝手に拒み続ける。

『うあああああ！』

痛みのあまり声ができる。

その瞬間また意識が途切れた。

すると、またあの光景・・・

『僕の・・・初人生の・・・』

「さあ、怖くないさ。人類のためなんだよ。わかってくれるね？」

ある部屋で少女がベッドの上に寝かされていた。

その上には眩しいほどの光があつて、少女は光になれておらず、目

さえも開けられない。

状況を理解するのは耳だけが頼り・・・

周りには数人の男性がいるらしい・・・

ブツブツと何かを言い合っている。

内容は少女が理解するには難しい言葉ばかりだった。

「さあ、気を楽しにして・・・そう、力を抜いて」

少女は怖がっていたが、男性があまりにも優しく、少女はそれを中心に
地よく思ってしまった。

力を抜いた少女の体から、意識が遠のいていく・・・
腕には微かな痛みが走る・・・

少女が目を覚ますと、さっきまでいたベッドに寝ていた。

眩しい光はなく、少女はたやすく目を開けることが出来た。が、し
かし・・・

少女は起き上がることが出来なかった。

自分の体なのに言うことを聞かない。

しばらくして少女は、体に感覚がないことに気づいた・・・

一体自分の体はどうなっているのか・・・

頼りなのは視覚と聴覚・・・

だが今の状況に視覚と聴覚は意味をなさなかった・・・

見えるのは白い天井だけ・・・
音は何も聞こえない・・・

少女に恐怖が襲ってきた・・・
ここに来て初めての恐怖・・・

暗闇には慣れていた・・・
一人にもなれていた・・・

ただ少女の慣れないことは・・・

【自分の体が自分ではないこと】
それだけが最大の恐怖だった・・・

『助けて・・・沙・・・希・・・怖い・・・怖いよ』

ここに来て少女は初めて涙を流した。
もしかしたら、涙を流すこと自体久し振りかもしれない・・・

『大丈夫なの？』
『誰？』

少女の耳には聞き覚えのない少年の声が聞こえた・・・

『助けて・・・体が・・・動か・・・な・・・い』
『仕方ないよ。それは副作用だから・・・しばらくしたら動けるからさ』

少年はそう言っ去っていった。

しばらく少女は呆然と天井を見つめていた・・・
しばらくすると、突然体に感覚が戻ってきた・・・

少女は体を起こしてみた。すると体はすんなりと動いてくれた・・・
少女はその足で部屋へと足を運んだ・・・

『あの子・・・誰だったんだろ？部屋では見たことないけど・・・』

『風・・・風も何かされた？』

『うん・・・沙希も何かされたの？』

廊下には風と一緒に来た少女が現れた。
どうやら、この子が沙希と言う子らしい・・・

『うん・・・体が動かなくて、不安だったけど・・・男の子がね、
教えてくれたの』

『沙希もなの？あたしもだよ。男の子がきて・・・その子見たこと
ある？』

『顔は見えなかったから確信はないけど・・・あんな声聞いたこと
なかった・・・』

『あたしも・・・』

二人の少女。凧と沙希は、ここに恐怖を覚えた。
しかし、その少年は二人光だったから、恐怖にも耐えれた・・・
それなのにその少年は・・・

『どうして僕を裏切ったの・・・』

凧は目を覚ますと、無意識に呟いていた。

『僕は何を言ってるの？あの男たちが嘘をついたから？』

『それは違うよ凧』

『沙希！』

突然凧の耳には聞き覚えのある声がした・・・
沙希は凧のベッドに腰かけていた。

『もしかしてずっといたの？』

『今来たところ・・・学校終わったからね』

『もうそんな時間？』

凧が時計に目をやると、時計の針十六時を指していた。

『そんなに寝てたんだ・・・』

『凧もやつと昔と向き合うようになったんだね。
ちよつと嬉しいな・・・』

その先の話は、あたしからするよ』

第8話 正体、そして疑問の解決

「凧が向き合ってくれる以上。あたしはすべてを貴女に話すわ」
『うん・・・』

沙希は真剣な顔で凧を見つめる。

凧はそんな沙希におされてか、力のない返事を返した・・・

「あの施設のことはもう知ったわね」

『うん・・・』

「じゃあ、あの男の子のことを話すから」

『うん・・・』

沙希の言葉に、凧は相槌を打つしかなかった。

凧は口出しの出来ない何かと、知りたい。
という気持ちが増えてきた。

「よく聞いてね。あの少年はフェランツって言ってね、イタリア出身なの。」

神出鬼没な少年らしくてね・・・

だからあたし達もあの時が始めてだった。

でも、あの少年はあたし達の前にはよく姿を現した。
しかも、あたし達がピンチな時に必ず・・・」

沙希はその時のことを思い出しているのか、暗い顔をしながら、一度窓を見つめ、何かを思いつめる顔をする。

凧はそんな沙希に、その少年はどうしたのか？
という疑問が出てきた。

そして、それと同時に

『どうして裏切ったのか』と、さっき口から勝手に出た言葉が頭に
浮かぶ。

それを沙希に尋ねようか、尋ねまいか・・・

凧が考えているうちに、沙希は口を開き始めていた。

「その少年はあたし達を何度も救ってくれた。あの施設には光がな
かった。

元々あたし達には光がなかった。だけど、あの施設には光があると
信じて疑わなかった。

でも、光がないことを身をもって知らされた。

だけど、あの子が、フェランツだけが、あたし達にとってのかけが
えのない光だったの・・・

なのに・・・

なのに・・・」

沙希は涙を押し殺しながら、俯いていた。

いやな思い出を、思い出すだけでも嫌だろうに、それを伝えなくて
はならない。

言葉にすることは、彼女にとって、とても残酷なことに思えた。

『裏切った・・・の？』

「えっ・・・！」

凧の言葉に、沙希は驚いて顔をあげた。

そんなことまでは知らないはずなのに・・・
きっと彼女はそう思っているのだろう。

『さつき僕は、何故か知らないけど、あの出来事を見た後で、どうして裏切ったの？て・・・』

勝手に口が開いたんだ。最初は言ったようにあの男達のことだと思った。

でも、今沙希を見て思ったんだ』

「そう・・・でも、どう裏切られたかは知らないでしょ？」

『うん・・・』

それから沙希は落ち着くために、ため息のような息を吐き、話始めた。

「ある日あたし達は見てしまったの。男達とフェランツが話しているのを・・・」

そして知ってしまったの。

とんでもない真実を・・・

この施設がやっていること、それは全て・・・

フェランツの仕業だったって・・・

それを聞いた時、あたしは信じられない気持ちでいた。

いつも助けてくれた人。そんな人が望むわけないって・・・

そして考えたわ。きっとこれはフェランツが望んだことではなく、

フェランツも誰かに頼まれているんだって・・・」

『それが・・・裏切り?』

「まあ、そうね・・・それで続きがね・・・

あたし達は信じられなくて、それを直接フェランツに確かめに行くことにしたの・・・

フェランツは優しい人で、あたし達の話は、何でも笑顔で聞いてくれた。

でも・・・その話をフェランツに言ったとき、急に目の色変えて・・・

たぶん腹を殴られたんだろうけど、一瞬の衝撃の後

目が覚めた時にはベツトの上。初めて凧と隣のベツトで・・・そこにはフェランツがいた。

【知らなければ良かったのに、君達には実験代になってもらう。かつてない大きなことを体験してもらうから。

凧、君には輪廻を体験してもらう。そして沙希、君には何年後かわからないけど、立会い人として、このことを凧に伝えてもらう。

だから凧、君の記憶は消させてもらうよ。僕の実験が成功するのは何年後なのか・・・

それは沙希。君によってわかるさ。

凧に与える能力は、僕を殺せば解除される。

何年後かに、君は凧に伝え、僕を殺しにすればいいさ】

フェランツはそう言って、あたし達を・・・」

『だから僕は記憶がなくて・・・』

凧は沙希の言葉を整理しながら、理解した。

そして、沙希のしてほしいこと。

それがようやく理解でき、今までの疑問も全て解決した。

後はフェランツの言うように、彼を殺しに行き、僕的能力を消す。

・・・

凧の心の中にもややもやとした気持ちが見れる。

本当にそれでいいのか？

短い期間ではあったが、僕は確実にこの能力を体験した。

不思議に思ったのは今回が始めて、だからこの能力が嫌だなんて、考えたこともなかった。

もし彼を殺しに行けば、もう体験することはない。
それは嬉しいことなのか・・・

考えれば考えるほど、凧は頭を悩ますだけだった。

9話 意見の食い違い

『凧、今から行こうよ。彼の元へ・・・』

僕はここでフェランツを殺しに行くべきなのか？

だって僕はこんなにもこの転生を楽しんでいるじゃないか。

それは時には辛い人生だってあった。だけどそんなのは誰しも同じこと。

僕は今までの記憶が消えてしまうことが怖いかもしれない。

経った一年ずつしか過ごさない人生だけど、それでも・・・

『凧？』

『僕はフェランツを殺すべきなのかな？』

『何言ってるの？凧・・・あたしの話しちゃんと聞いてたの？彼さえ殺せば貴女のこの忌まわしい能力はなくなるのよ！』

【忌まわしい能力】

沙希はそう言った。

僕は全然そうは思わないのに・・・

もしかして沙希は僕がこの能力を嫌なものだと思っているって思ってくれてるのかな？

『沙希は勘違いしてるよ。僕はこの能力嫌いじゃないし、それに・・・僕が殺すべきなのか？って聞いたのは、僕はこの能力がなくなってもいいのか？って意味なんだ』

『どういうこと？』

沙希は驚いた目で僕を見つめていた。

無理もないだろう。

この能力が僕にとって大切なものだなんて・・・

沙希は思ってもいなかっただろうから・・・

『僕はこの能力が好きだ。どんどん記憶が増えて、一年ごとに色んな人に会える。一年ごとに色んな性格になれる。こんな経験誰にも出来ない。僕は人と違う。それは嫌なことじゃない。嬉しいことなんだ』

『風・・・貴女は勘違いしてるわ。そんなことが嬉しいはずないじゃない！貴女は人と違う。一年しか命がもたない。一年で死んじゃう・・・それが貴女は嬉しいの？もしこれから先貴女が人生を繰り返してるうちに大切な人が、大切なものが出来たら、貴女はきっと後悔するわ』

『沙希！』

沙希はそういい残して部屋を出て行った・・・

大切なものが出来たとき、後悔する・・・

大切なもの・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6344g/>

輪廻と僕

2010年10月22日10時14分発行